

CB・CSO アワード 2015「大阪市長賞」受賞記念

「NPO 法人西淀川子どもセンター」代表理事 西川日奈子さんと谷川市民局長との対談
(平成 28 年 2 月 12 日 大阪市役所本庁舎にて)



パラソル1本からのスタート

—活動のきっかけについてお聞かせください。

【西川氏】

こどもの貧困、虐待など様々な問題があります。大阪市の児童虐待相談件数は全国一で、こども相談センター(児童相談所)での相談件数は 4,000 件を超えていますが、そのほとんどが一時保護には至りません。児童相談所での収容人数も少なく、職員も少ない。そんな中、地域見守りといわれていますが、なかなか上手くいっていません。12 年間、地域で保護司をさせていただきながら、実態の一部を知りました。

私は、子どもへの暴力防止プログラム「CAP」をやってきて、いろんな都道府県や市内の他区を見てきましたが、自分の地元で保護司をしてみたら、支援が必要な子どもがたくさんいることにショックを受け、こんなことをしている場合ではない、と感じました。

子どもたちがいっぱい話したいことがあることは知っていましたので、「こども支援」をしたいと思ったのが、2005 年頃です。子どもの相談の受け皿を作ろうと思って、2005 年から、区のアクションプラン推進委員会にも参加しました。

子ども本人が色々なことを気軽に安心して話せる場づくりをしようと、相談事業を始めました。当時は、実施する場所がなく、近所の公園にパラソル1本で始めました。2007 年のことです。2008 年3月に NPO 法人格を取得しました。2008 年夏には、大阪市都市整備局の市営住宅コミュニティプロポーザル(※1)で市営住宅に入居し、事務局を構えました。

※1 大阪市では、高齢化が進む市営住宅団地において、高齢者の生活支援や子育てサービスの提供など、団地や地域の活性化につながるコミュニティビジネス等の活動拠点として、NPO 等の団体に市営住宅1階の空き住戸を提供しています。

一どのような活動をされていますか。

【西川氏】

私たちは、「子どもとの活動」「大人に向けての活動」「各専門機関と連携 緊急介入と見守り」の3分野を柱に活動をしています。「子どもとの活動」としては、子ども本人が気軽に安心して話せる場づくりの相談室「ぼびんず」を始めました。そして、子どもたちに相談に来てもらうには、地域の大人に活動を知ってもらうことが大切と考え、「大人に向けての活動」として、私たちが何をしたいか説明し、子どもを見守る地域の大人の輪をひろげる活動をしています。これを「よっしゃ」と名付けました。「各専門機関と連携 緊急介入と見守り」、これが難しく、行政や専門機関に子どもたちのことを対等に話すことはハードルが高かったのですが、いろいろな方に応援していただいてやってきました。

一番やりたかったことは、子どもの話を聴くことです。予約も料金も必要なく、子どもたちが自由に行ける場所、塾でも学童保育でもなく、どんな子も来れるような場所を「ぼびんず文庫」として提供しています。保護司時代に担当していた子の口コミなどもあって、いろんな子どもたちが集まってきました。



みんなで食事づくり



いっしょに「いただきます！」



宿題中です

「まだ帰りたくない」子どもたちのつぶやきから始まった

一 夜間サテライト事業のきっかけを教えてください。

【西川氏】

子どもたちと過ごしていく中で、十分な学習ができていない子どもらの「イチから学習をやり直したい」という思いから九九などを一緒に勉強したり、あまりごはんを食べていない子が定時制高校へ行く前に、おにぎりを食べられるよう、おにぎりの作り方を教えたりもしました。自分で材料を買ってごはんをつくることも教えました。

子どもたちとの出会い、子どもたちと関わっていく中で、特に土曜日になると「昨日の晩から何も食べてない」との子どもつぶやきがありました。「これではアカン」と、土曜日にはタコヤキやホットケーキを焼いたりしました。また、活動時間が終わってもなかなか家に帰らない子がいて、今度はその子どもたちが心配になってきました。家に誰もいないから帰りたくないんです。だから別の場所へ出かけ、そして深夜のコンビニで晩ごはんを買って食べる。目の前には生活の不安定さを抱えた子どもたちがいたのです。

そんな子どもたちが、夜ごはんの時間を一緒に過ごし、日常の何気ない関わりや会話の中で、気持ちの発散や心身を安定させる機会になればと思い、「夜間サテライト事業」を始めました。

【谷川市民局長】

今のお話をお伺いして最初に思いましたのは、大阪市という行政が対応しているのは本当に氷山の一角で、水面下には色々な課題を抱えている子どもがいる、ということです。これは、子どもたちに限らないと思うのですが。そんな中、大阪市として目指しているのが、まさに「公助」と「共助」です。「公助」だけでは全ての課題に対応しきれません。行政だけでは対応できないことに取り組んでいただき、有難く思っています。

さらに、裾野の拡がりということだと思いますと、子どもたちと関わりをもつことで、掘り下げたところにある課題がどんどん見えてくるようになっていかれたのかな、と思いました。そして、何とかしようという気持ちをお持ちいただいて活動してくださっていると感じました。

「おいでおいで」と言っても、なかなか子どもは来てくれません。やはり、地域社会における「認知」がないと、上手く活動できません。地域との関係を見据えてやってこられたことで、安心して子どもたちを預けられることが地域の人にも伝わったんでしょうね。



【西川氏】

「6人に1人が貧困の子ども」ということが明らかになってから、「夜間サテライト事業」も着目されて、貧困の子どもについてよく聞かれます。実感としては、「子どもたちと関わってみたら、貧困が多いな」という感じです。企業とかにお勤めされている一般的な家庭の人たちは、不安定さを抱えた子どもたちが大勢いることにビックリされるけれど、本当は出会っているはずなんです。見えにくいだけなんです。

【谷川市民局長】

入りこまないと見えてこない、ということですね。

【西川氏】

その子だけが抱えている課題と思っていたら、見過ごしてしまいますし、6人に1人なら、その他の5人に目を向けてしまいます。

私たちは、6人に1人の「1人」を、子どもとのやり取りを通じ、つぶやきの中から見つけています。子どもたちとずっと付き合っていたら、「いつも夜は一人やで」などといったつぶやきがあるんです。

【谷川市民局長】

そのような発言が出るまで関係を築いていくことが必要なんでしょうね。

【西川氏】

そうなんです。そして、こういうことを言えるのは、活動に参加してくれている若い人たちの力があるんです。若い人の力って凄いです。

活動の担い手が若い人へと拡がった

【西川氏】

夜間サテライト事業のきっかけは、2013年度の「大阪市市民活動推進助成事業(※2)」です。初めていただいた公的な助成金で「ボランティア養成講座」をさせていただいたのをきっかけに、活動が続いてきました。

この養成講座の後、若いボランティアが増えてきました。子どもたちと直接関わってくれている若い



ボランティアは30人ぐらいです。6年以上来てくれている20代～30代ぐらいの中堅スタッフが8人ぐらいで、熟年組も8人ぐらいの、三層構造です。

若いボランティアには、子どもたちと同じ目線で話をしてほしいと思っています。子どもたちがロールモデルにしていける人と出会うことができればいいなと思っています。また、若いボランティアにも「若い人が活躍できる」という感覚をつかんでもらえればと思っています。

子どもの現場は任せるけど、そこで起きていることはときどき交通整理をしたり「それは違うで、こうやったほうがいいよ、気をつけてね。」などとアドバイスしたり。

※2 本市では市民活動が活発に展開される環境づくりの一環として、ボランティア・NPOなどの市民活動を支援するため、区政推進基金(市民活動団体支援型)に積みたてられた市民、企業等からの寄附金を活用し、市民活動団体が行う公益的な事業に対して助成を行っています。

【谷川市民局長】

この活動の第一印象は、昔の親戚の状態を今、違う形で復活しているということです。親戚がいて、その中でコミュニティが形成されていれば、言いやすい年代というのがありますので、例えばいとこの兄ちゃんと話をする事ができるというのがありました。親がいなくても、近くに親戚がいれば、「行ってごはん食べといで」とか、いとこの会話とかがあつて、そういうのがあれば少し助かるというのはありますね。自分だけで抱えているのではなくて、いいかどうかは別として、昔の大家族主義(大親戚主義)がなくなつてきている中で、今本当に頑張つていただいて、その機能を違う形で復活する、そういうことに取り組んでいただいている、という第一印象を持ちました。

【西川氏】

私は送迎を手伝っていますが、今までほとんど口を聞かなかった子が、若いボランティアと一緒にアニメソングの大合唱になったんです。実は、子どもと若いボランティアがその歌を知っていたんです。何かのきっかけにポンとふたが開くんです。

【谷川市民局長】

同世代だからでしょうか。

【西川氏】

分かってくれる人、ということは大きいですね。ゲームのことやアニメのことなど。私たちは、テレビやユーチューブばかり見ているとつい咎めてしまいます。若い子は違うアプローチをするんです。「それだけ見ようと思うと時間かかるやろなあ！」と。



【谷川市民局長】

同じ体験者としての立場で、受け入れた上での発言なんですね。アニメ、ユーチューブの例に共通していると思うのは、「同じ土俵で語ってくれる人がいる、いない」の違いでしょうね。

【西川氏】

そうです、「わかってほしい」なんです。

一活動を継続・安定させるために工夫していることはありますか。

【西川氏】

先ほど申し上げましたように、若いボランティアが増えてきています。若いボランティアの中には、ヘルパーやSSW(スクールソーシャルワーカー)などの他の仕事をしながら活動をしてきている人もいます。人件費があるからいい活動ができると思っているわけではありませんが、継続して活動を続けてもらうには無償では駄目ですよね。人件費をどうやって捻出するかが課題です。助成金をもらって事

業を実施する場合も人件費で悩みますね。1・2割しか人件費に充てられないものが多いんです。
(※3)

幸い、賛助会員が増え、家賃や光熱費は賄えるようになりましたが、それだけでは活動できません。

そこで、今年になって、コンサルタントの方(※4)などに来ていただいて、事業の中期計画の作成や企業の「よっしゃ」(賛助団体)を募ることに取り組みはじめました。その中で、活動を始めたそもそもの動機や今後のビジョンを聞かれるんです。そこで、一緒に活動しているメンバーに活動を始めたきっかけを聞いてみたら、示し合わせたように「たまたま」「つい」という返事なんです。

※3 大阪市市民活動推進助成事業では、人件費(事業従事者分のみ)も補助対象になります。

※4 大阪市では、コミュニティビジネス(CB)等促進事業としてCB等の起業や運営に関するサポートを実施しています。その一環として、専門的な支援(事業計画のブラッシュアップや会計実務など)が必要な案件については、専門家による無料相談を実施しています。

【谷川市民局長】

今の心境と当時のきっかけを分けて考えると、きっかけはそうなのかもしれないですね。そこから、ずっと一緒に活動を続けておられるということは、まさに「共感」されるものがあるんですね。

こういう活動の実態を知るとアンテナを張る人が増えていく。そんなことを思うと、企業の人に活動を見に来てもらったり、講演を聞いてもらうことで、意識を持っている大人を増やすことが活動の裾野を広げることにつながるように思います。



地域の人とつながりながら地域で見守る

―地域とのつながりについて教えてください。

【西川氏】

地域とのつながりも大切にしています。私のことを子ども時代から知ってくれている方も多いです。何かあれば、「よっしゃ」と立ち上がってくれる人たちもいます。

2年前まで、子どもたちが来る前の午前中の時間帯に、地域の女性を対象にワンコインネイルサロンもしていました。普段ネイルサロンに行かない年輩の女性たちが多く来られて、喜ばれるんです。そして、この方々が、近所の子どもの情報を教えてくれたり、バザーのお手伝いをしてくれたり、ひと肌脱いでくれて、私たちの活動を支援してくださっているんです。

地域のネットワークはすごいです。子どもの様子も分かります。一方、子どもが折角 SOS を出して保護されても、その子ども本人が取り下げってしまうこともあります。保護されたら自分の学校に行かせてもらえないですし。

しんどい子どもを、思うようには保護してもらえないし、助けてもらえない。やっと2か月間保護されていても地域に帰ってきて、面接に行くかと思えば子ども相談センターとの約束の面接にも行かなかったり。

【谷川市民局長】

専門化されてないところの専門家ですね。専門化されている児童相談所などがありますが、そうでない部分のまさに専門家でいらっしゃるんですね。

【西川氏】

ただのおせっかいではあかんと思っています。子どもにとって適切なおせっかいでないといけません。大人は簡単に子どもを支配してしまう。善意でこうなってほしいとか願ってしまうでしょ。これは子どもにとっては時々違うんです。「一緒に生きてほしい」というのがまず最初にあるんです。

地域の役割は、「ここで見てるから」「なんとかなる。なんとかなる。」とそばで言い続けてあげることだと思っています。

地域の課題と特徴と地域のキーパーソンを考えながら、何ができるかを考えたらいと思います。大きなことからやらなくても、「子どもと出会うということからやっていただけたら」「話をしてもらえたら」と思っています。

【谷川市民局長】

西川さんのような方同士がお互いつながりあう、専門化されていない分野の専門家同士がどうつながっていくのか、ということです。



—行政や学校との連携についてお伺いします。

【西川氏】

学校の先生たちは、子ども一人ひとりにふりまわされて、時間をかけて疲れていますが、子どもはお互いにつながりたがっています。「つなぐ」こと、コーディネート力を大切にしてほしいです。

例えば、長い間不登校だった子が学校に行こうと思うと、制服、体操服、上靴など全部揃えないといけないけれど、それができない状況の親がいます。そうすると、学校へ行くことが余計に面倒になり、「やっぱり行かない」となってしまいます。段取りや手続きに弱い親がいるので、学校で察知して助けてくれることが、再登校のきっかけになります。

ピンチはチャンス。学校が介入するチャンス。学校が親と会話するチャンス。やっぱり学校とうまくつながらないといけないです。学校の先生がコーディネーター力を持ってほしいです。

行政は行政、民間は民間の立場で、自分の持っている「つなげる力」を回復して、信頼し合っていかなければならない。その信頼しあうところでは、もっと対等にならないといけないと思いますが、難しいです。

【谷川市民局長】

個人の時代がもてはやされたり、世の中が便利になって、人とつながらなくても、本質的ではなく表面的に何とでもなる。その辺りで、一定のひずみや限界が見えてきています。もう一度、ご近所、子どもたち同士のつながりを見直す必要があります。ひずみにどう対処していくか、行政の課題だと思っています。そういった中で、まさにこのような活動をしてくださっていて、有難いですし、何より心強いです。

【西川氏】

私たちは、後に続いて子ども支援を志す方を応援する立場だとも思っています。是非、行政には、そうした志を有する方と、地域のキーパーソンとがつながれる場を提供するなどの支援をしてほしいですね。

